

Collaborative Activity of Kindergarten, Elemental School, Junior High School and High School Related by Digital Picture books (1) : The Conception of the Activity and Teachers' and Observers' Evaluation for it

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/44757

デジタル絵本でつながる幼小中高連携活動 1

：活動概要と担当教員・観察者の評価

綿引伴子・滝口圭子・尾島恭子・松田洋介・

川谷内哲二*・西多由貴江**・中田泉***・橋本正恵****・服部浩司****

Collaborative Activity of Kindergarten, Elemental School, Junior High School and High School Related by Digital Picture books (1) :The Conception of the Activity and Teachers' and Observers' Evaluation for it

Tomoko WATAHIKI・Keiko TAKIGUCHI・Kyoko OJIMA・Yosuke MATSUDA・
Tetsuji KAWAYACHI*・Yukie NISHITA**・Izumi NAKATA***・
Masae HASHIMOTO****・Koji HATTORI****

目的と背景

少子化等社会の変化にともない家族のあり方や地域共同体が変化するなか、子どもがさまざまな人とかかわる力の育成は、今日の大きな課題と言える。また、現在、教員免許法の改正も含め幼小連携や小中連携が検討されている。小中一貫校や高大接続も現実的な検討が始まっており、まさに既存の校種等の再編が進められようとしている。

このような背景から、保育所・幼稚園から高等学校までを含む異校種間の交流が試みられたり、カリキュラム構築を目指す研究が行われたりしている¹⁾。

国立大学法人教員養成系学部では、附属学校園を擁しており、校種間の連携環境が整っている。また、附属学校園の存在意義は以前にも増して問われており、連携教育の実践や研究を推進し社会へ発信することが求められている²⁾。

本研究は、すでに発表している研究^{3)~5)}と同様に、金沢大学学校教育学類・附属学校園研究推進委員会⁶⁾の技術・家庭科小委員会(委員長；綿引伴子)において進めてきた一連の研究に連なるものである。現在の技術・家庭科小委員会は2010年度より活動を始め、幼小中高の連携活動の検討は2012年度より行ってきた。金沢

大学学校教育学類附属幼稚園、小学校、中学校、高等学校が同一敷地内にあるという特色を生かし、4校園連携の実践開発に取り組んできた。

本小委員会での校園連携活動の開発では、カリキュラムの構築をめざしたり、理念や目標を明確に設定してそのための活動を考えたりするのではなく、本小委員会に参加しているメンバーの状況から、その年度に可能な連携活動を模索してきた。各校園では学校園研究等に精力的に取り組んでいるため、本小委員会の活動により、教員の多忙化に拍車をかけ、負担感を大きくし活動の継続を困難にするのを避けるためである。

2012年度には、中学校家庭科保育分野において中学生と幼稚園児が数回にわたる交流を行った。中学生にとっては、数回の園児との交流をもとにしながら中学校に園児を招くという企画を練り上げ、幼児の発達を理解する自主的な学習を行うことができた。幼児にとってはさまざまな人とかかわる経験となった^{7) 8)}。また、幼稚園児・小学生・中学生がグループで味噌汁を作り、作った味噌汁とお弁当を食べる交流を行った^{9) 10)}。この活動の特徴的な点は、幼小中三者間の交流であることや三者で味噌汁を

作って食べるということ、小・中の代表の児童・生徒からなる実行委員会が中心となり計画したことである。

2013年度・2014年度は、高校生が情報の授業で幼児や児童向けのデジタル絵本を作成し、それを幼稚園児と小学生に紹介した。その様子を撮影したビデオとデジタル絵本を、中学生が家庭科の保育分野の授業で幼児の発達を学ぶさいに教材の一部として用いることにした。2015年度も2016年2月に実施を予定している。

本研究では、2013年度に実施したデジタル絵本でつながる幼小中高の連携活動について、活動概要と成果や課題を検討する。特に、これまで実施が困難で実践の蓄積が少ない4校園交流の可能性を試行的に探ることを目的とする。

連携活動の内容

本実践は、本小委員会メンバーの一人が担当する高校の情報の授業で、デジタル絵本を作成していた実績に着目し考案された。

(1)活動参加者

- ・金沢大学学校教育学類附属幼稚園年少（3歳児）1クラス30名
- ・金沢大学学校教育学類附属小学校1年生1クラス33名
- ・金沢大学学校教育学類附属中学校3年生4クラス160名
- ・金沢大学学校教育学類附属高等学校1年生3クラス111名

いずれの校園でも、本小委員会メンバーが担当するクラスである。

(2)実践日

- ・幼稚園児は2014年2月13日9:45～10:35および2月20日10:45～11:35
- ・小学生は同年2月21日10:45～11:35

高校の授業時間1コマ（50分）に、幼稚園と小学校が合わせて行った。

(3)活動内容

高校の情報では次のような授業計画で進めた。

題材名「デジタル絵本の作成と発表」

- ① デジタル絵本のテーマの決定（1時間）
- ② グループによる作成作業（5時間）
- ③ 園児・小学生に絵本を紹介（1時間）
- ④ 相互評価会（1時間）

i. 高校生が情報の授業で、パーソナルコンピュータを用いて、幼稚園年少児（3歳児）または小学1年生を見せる対象とする4枚（タイトルを除く）からなるデジタル絵本を各グループ1本作成する。高校1年生3クラスのうち、2クラスは幼稚園児、1クラスは小学生を対象とする。4枚で起承転結を考え、アニメーションや効果音を盛り込むこと、各グループ1人1枚作成することを条件とする。作成にあたって、高校生が対象者の発達状況を理解するために、小学生対象グループは小学校の教科書8冊（国語、算数、生活、音楽、道徳）を参考にして作成する。幼稚園児対象グループは、インターネット等から情報を得て参考にする。幼児のビデオや幼稚園での観察を予定したが実施できなかった。実際には、ヒーローものや物語などを参考にしていた。各グループ「音声あり」と「音声なし」を作成し、幼稚園や小学校では、「音声なし」を高校生が声を出して見せる。「音声あり」は中学生が分析のときに見る。高校各クラスで10グループづくり、3クラスで幼稚園児用20本、小学生用10本、合計30本の絵本が作成される。

ii. 高校生が完成したデジタル絵本をもって幼稚園または小学校に赴き、グループごとに作成した絵本を幼稚園児や小学生に紹介する。園児は5グループ（6名/グループ）、小学生は5グループ（6、7名/グループ）になる。各グループが2本ずつ絵本を鑑賞する。幼稚園児は2日（高校2クラス）、小学生は1日（高校1クラス）行う。幼稚園では教室で1グループ、多目的室で1グループ、プレイルームで3グループ同時に絵本を鑑賞する。小学校では教室で2グループ、家庭科室で1グループ、ホールで2グループが、同時に絵本を鑑賞する。各回、幼稚園と小学校では5グループ用のパソコン、スクリーン、プ

ロジェクターを準備する。附属幼稚園、小学校、中学校、高校は同一敷地内にあり、校舎間を5分以内で移動できる。

iii. 実施後に各校園で実践を振り返る。園児は教師指導のもと感想等を言い合う。小学生は高校生へのお礼の絵や文を書き高校生に送る。高校生は園児や小学生の反応等により、自分たちの作成した絵本を省察する。相互評価を予定したが、時間不足のため実施できなかった。

iv. 中学生は、2014年度家庭科の保育の授業において、園児と高校生との活動の録画や高校生が作成したデジタル絵本を視聴し、子どもの発達や児童文化財についての学習教材として使用する。

但し、ivについては、2014年度までに実践できず、後述するように課題として残った。

(4)活動の様子と作成したデジタル絵本

高校生が作成したデジタル絵本は、次のような題であった。

A組（園児対象）

おいしいおかゆ

しらゆきひめ

いちご戦隊ヤマネンジャー

サンタ

おむすびぼろぼろ

ねこの手も借りたいぱーとよん

犬と肉

いぬとあり

B組（園児対象）

こわいものおうじ

さとしゅうと怪獣たち

アリとキリギリス

不審者vsガチムキ先生

石の上にも三年

ウサギとカメ

浦島太郎

ねずみのおんがえし

きんのおの・ぎんのおの

C組（小学生対象）

一寸法師

うさぎとかめと○○

おおきなかぶ

桃次郎

どろんここぶた

浦島太郎

マッチ売りの少女

かぐやひめ

テーマは童話や物語、ことわざ、標語などから設定しているものが多い。テーマ名を除く4枚のスライドでストーリーの起承転結を考え、アニメーションや音声を入れる。デジタル絵本の例を図1に示す。

実践の様子を写真で示す。写真1～4は幼稚園での実践の様子であり、写真5～8は小学校での実践の様子である。グループによる差が見られたが、高校生は園児や小学生に語りかけて興味を引きながらデジタル絵本を紹介していた（写真2、6）。

小学生は、言葉あそびやひねりを入れた絵本のストーリーをおもしろがったり、高校生とのおしゃべりを楽しんだりしていた（写真7）。園児は絵本そのものよりも高校生とのかかわりを楽しんでいた。絵本の後に、高校生が用意してきた絵本や手あそび、手品に引き込まれていた（写真3、4）。高校生と追いかっこをしたがる園児もいた。

(5)小学生から高校生へのお礼

小学生は、活動後、一言ずつお礼メッセージを書いてグループで1枚の絵にして高校生に送った（図2）。

調査方法

上記のとおり実施した連携活動の成果について、以下のとおり調査を行った。

- ① 本実践活動クラスの幼稚園、小学校、高校教員（各1名）の省察（2014年2月28日および3月10日）
- ② 本実践活動参観者（3名）の省察（2014年2月28日および3月10日）。参観者は、大学教員2名、中学教員1名である。

図1 デジタル絵本の作品例

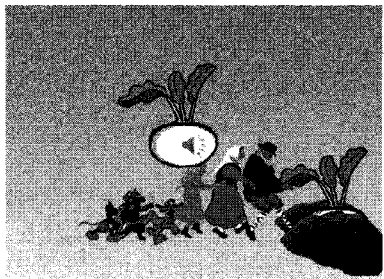




写真1：初めに幼稚園ホールで挨拶をする



写真5：グループごとにデジタル絵本を小学生に披露する

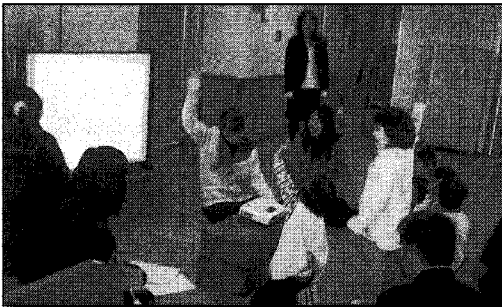


写真2：グループごとにデジタル絵本を園児に披露する



写真6：小学生が絵本に引き込まれる



写真3：男子高校生が家から持ってきた絵本を園児に読み聞かせる

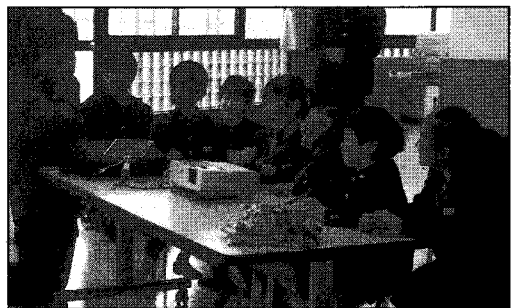


写真7：小学生が高校生の話に大笑いをする

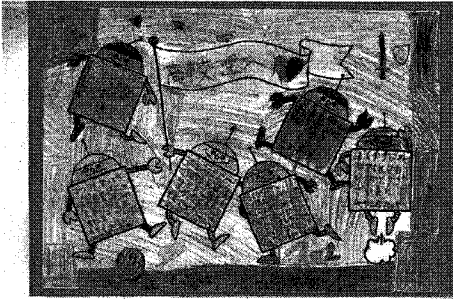


写真4：高校生が手を使ったマジックを園児に見せる



写真8：最後に教室で挨拶をして終わる

図2 小学生から高校生へのお礼の絵・メッセージ



- ③ 小学生および高校生を対象に、担任を通して活動の感想や評価を尋ねる質問紙調査(実施後、2014年2月)
- ④ 幼稚園教員による観察チェックリストに基づく評定
- ①②の省察は、実践後1ヶ月以内に開催した2回の技術・家庭科小員会で、実践についての振り返りを行った際に出席者が発言した内容を書き起こしたものをデータとする。書き起こしたデータからスクリプトを作成し分析する。①②については本報で、③については2報¹¹⁾で報告する。

本実践の結果と考察

幼稚園、小学校、高校の本実践活動担当教員
の省察および本実践活動参観者の省察を、「活

動内容」「幼稚園児・小学生・高校生の様子」「今後の実施」の観点でまとめた(表1、表2)。以下のA~Fは表中の記号と同一人物で、A・B・Cは校園の担当教員、D・E・Fは観察者である。Fは幼稚園のみ観察した。

(1) 活動内容について

15分でアニメーションを含めた4枚のデジタル絵本を披露するためには、興味を惹くような話し方や見せ方、また園児や小学生への話しかけ方を工夫することが求められ、グループによる差が見られた。15分で行う予定が3分で終わってしまったグループもあったが、登場人物になりきって園児・児童を楽しませようとしていた(表1:①A・C、②B、表2:②高校生D・E・F)。

園児が年少クラス(3歳児)だったこともあるが、高校生の作成したデジタル絵本の内容や話し方は、園児には理解が難しい様子が見られた。一方、小学1年生は絵本の展開や高校生の言葉あそびを理解しており、高校生とのやり取りも楽しんでいた(表1:①B・C、表2:②小学生D・E、幼と小の違いD・E)。家庭科と連携して幼児へのかかわりや幼児の関心について事前に学ぶ機会を設定できると、幼児に適した絵本を作成することができるだろうと思われる。

時間が余った時のために、事前に高校教員から「絵本、手品、手遊びなどを用意しておくように」と伝えておいたことは効果的であった。これについては、幼稚園教員および観察者D、Eが評価していた(表1:①A、②B、表2:②高校生E、②小学生D)。

絵本を見せる環境設定では、プレイルームのような大きな部屋でも1部屋に複数グループあると聞きづらい(表1:①B)、大きなスクリーンだと園児と高校生との距離ができて声が届きづらかったり心理的距離ができたりする(表2:①E)等の反省があげられた。

(2) 幼稚園児・小学生・高校生の様子

観察では、高校生も園児も小学生も、ほとん

どの人は笑顔で楽しそうに参加していた。消極的な参加状況については、担当教員も観察者もあげていない。

デジタル絵本の紹介の場面では、本実践の場合、絵本のストーリーやアレンジ、言葉あそび、ひねりの理解、高校生の話の理解の点で、3歳児の園児よりも小学1年生のほうが適しているように思われた（表1：①B、表2：幼少の違いD・E）。しかし、事前の学習により、高校生が幼児の発達の様子や幼児とのかかわり方を学べば、園児の思いや発達に合ったかかわりができたり、園児が理解しやすいデジタル絵本を作成したりすることができるだろう。

園児も小学生もともに、デジタル絵本そのものよりも高校生とのかかわりに期待しており、また実際に、手品やクイズ、絵を描くこと、絵本の読み聞かせ、追いかっけっことを楽しんでいた。特に園児にはその傾向が見られた（表1②B・C、表2：②幼稚園児E、小学生D、幼と小の違いE、③E）。

高校生の様子には、前年度中学生の時の幼児とかかわる経験が影響しているように思われた。その点については、担当教員の2名、観察者2名が発言している（表1：②A・B、表2：②高校生D・E）。本調査では、高校生への質問紙に、中学時の幼児とかかわる経験に関する調査項目を含めなかったので関連性は明らかにできなかった。

(3) 今後の実施について

上述したとおり、本実践に対し、校園担当教員3名と観察者3名はほぼ同様の意見であり、異なる見解はなかった。

各校園担当教員A・B・C、観察者D・Eは、改善点はあるものの継続して実践することに意味を見いだしている。高校教員は生徒の取り組みの様子や実施後の感想から、次年度も継続したいと述べ（表1：③A）、幼稚園教員は次年度も行うことに賛成したうえで、幼稚園のクラスを年中クラス（4歳児）に変える提案をしている（表1：③B）。小学校教員は、本実践での小

学生の様子から、これまであまり行われてこなかった小学生と中・高生との交流がもっとできることを希望している（表1：②C、③C）。

改善点としては次のことがあげられる。

- ・事前の学習により、高校生が幼児の発達の様子を学び、園児が理解しやすいデジタル絵本を作成したりする。

- ・絵本の読み方や、園児・児童とのかかわり方を事前に学習してから、デジタル絵本を紹介する。

- ・1教室1グループに設定することや大きすぎないスクリーンにするなど、デジタル絵本紹介の声聞きやすく、高校生と園児・児童が話しやすい環境を整える。

まとめと課題

本稿は、幼小中高の4校園の交流をめざして構想し取り組んだ活動の概要と成果および課題をまとめた。

活動を担当した教員や観察者の省察を分析した結果、改善点はあるものの双方にとって意義ある活動であると評価された。

園児は、デジタル絵本そのものよりも高校生とかかわれることを喜んでいて、高校生がデジタル絵本以外に用意してきた手遊びや手品、絵本などにも興味を示した。

小学生は、デジタル絵本のストーリー、アニメーションや言葉遊びやひねりなどを理解して絵本の内容に興味を示したが、高校生と話すことも楽しんでいて、本校園では、小学生と高校生の交流は初めての試みであったが、他校の実践でもほとんど見られない。今後、小学生と高校生の交流の効果を検討していきたい。その際、中学生と高校生の違いや、小学生の学年による違いなども含めたい。

高校生は、園児とのかかわり方やデジタル絵本に対する反応などに初めは戸惑いも見られたが、全体としては、上述したようなデジタル絵本以外のかかわりも含めて積極的にかかわる生徒が多かった。そのかかわり方には、前年度ま

表1 各校園の本実践活動担当教員の省察

① 活動内容 について	高校教員 A	<ul style="list-style-type: none"> ・幼・小の1グループに高の2グループが絵本を見せることが適切かどうかはやってみないとわからなかった(今回初めての実施)。時間や幼児・児童の理解等が心配で制限をかけすぎたため、4枚で15分はもたなかった。グループによっては3分で終わったグループがあった。次回は検討したい。 ・特に、1日目では初めてであったためどの程度なのかがわからなかった。同じ絵本を3~4回読んでも時間が余ったグループがあった。 ・絵本そのものは延ばせないで、絵本の初めなどでの話しかけなどを工夫するように伝えておいた。時間が余った時のため、絵本、手品、手遊びなど用意しておくように伝えたが、準備状況にはグループによる差があった。 ・昨年までは個人作成だったが、今回初めてグループで作成した。1グループ4枚で、グループでは「1人1枚作成」を条件にした。グループ差、グループ内のスライド差(個人差)が現れていた。
	幼稚園教員 B	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらいをどこにもっていくかによって実践の評価が分かれる。絵本の内容は幼児に合わないものもあった。かかわりの観点から見ると、去年かかわった高校生はよくかかわっていたと評価できる。3歳児にとっては、「絵本を一生懸命見る」をねらいにすると、出来たかどうかは疑問である。「かかわりをもつ」をねらいにすると、高校生に親しみをもつことができたのではない。 ・プレイルームでは3グループが行っていたので、ざわざわして聞こえにくかった。1部屋1グループなど絵本を見せる環境を整えるべきである。 ・家庭科の保育学習の観点を入れないと、「絵本を見せる」のは難しいように思う。幼児は、高校生の言葉遊びやひねりにはついていけない。
	小学校教員 C	<ul style="list-style-type: none"> ・高校生が登場人物になりきって話していることがよかった。音声なしで直接話してよかった。
② 幼稚園 児・小学 生・高校 生の様子	高校教員 A	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の感想に「よい刺激になった」「勉強になった」などがあった。 ・高校生に聞くと、去年の連携活動(本小委員会企画の「みそ汁づくり・お弁当交流会」や中学校保育学習での「幼児を招こう」)で園児とかかわる経験をしていた生徒は慣れていただい。
	幼稚園教員 B	<ul style="list-style-type: none"> ・3歳児にとっては、「絵本を一生懸命見る」をねらいにすると、出来たかどうかは疑問である。「かかわりをもつ」をねらいにすると、高校生に親しみをもつことができたのではない。 ・幼児は、デジタル絵本そのものよりも高校生と自由にかかわることをおもしろがっていた。 ・デジタル絵本の後に、高校生が家から持ってきた絵本を見せたり、絵を描いたりして、幼児を楽しませようとしていた。 ・去年かかわった高校生はよくかかわっていたと評価できる。 ・上手に話しかけながら見せているグループもあった。
	小学校教員 C	<ul style="list-style-type: none"> ・小学生は前日から楽しみにしていた。他のクラスは行わないので、「僕たち・私たちだけ特別」という思いがあった。 ・小学生数人と高校生数人のグループ同士だったので、小学生は安心して来た。姉妹のいない児童や一人っ子の児童は最初「どうしよう」と言いに来ており、おっかなびっくりだったが、グループで友達の様子を見たりしてすぐに打ち解けていた。 ・小学生も高校生もよい表情だった。ふだんは見られないようなハイテンションだった。小学生は、「また来てほしい、遊んでほしい」と思っている。 ・高校生と一緒に触れ合えることがよかった。今までは、せいぜい小学6年生までのかかわり。6年生がかわいがってくれているが、もっと上のお兄さん・お姉さん(中学生、高校生)とのかかわりもよいと思えた。
③ 今後の実 施につい て	高校教員 A	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の感想に「よい刺激になった」「勉強になった」などがあったので、今後継続出来たらよい。
	幼稚園教員 B	<ul style="list-style-type: none"> ・できれば来年も行えるとうい。幼稚園年中クラスだったら、高校に行って園児1グループが3本のデジタル絵本を見ることもできるだろう。
	小学校教員 C	<ul style="list-style-type: none"> ・これをきっかけに、小学生と中学生や高校生との交流がもっとあるとうい。

(発言のまま記載しているが、文末は常体に統一している。()内は著者による補足である。観点①

②③に関連する内容は、重複して掲載している。)

表2 本実践活動参観者の省察

<p>① 活動内容 について</p>	<p>D ・淡々と絵本を読み進めるのではなく、幼児とのやり取りも折々に挟まれていて、「共同作業」になるように工夫されていた点は、「こういうやり方もあるのか」と感心した。</p> <p>E ・小学生対象作成クラスが、小学1年生の教科書8冊（国語、算数、生活、音楽、道徳）を参考にしたのはよかった。テーマへのヒントを得たり小1の理解に役立ったようだ。教科書を参考にしたのか、「大きなカブ」をテーマに作成したグループがあった。幼児対象作成クラスには、幼児が好む絵本や紙芝居などを参考にしてもよいかもかもしれない。 ・小さなスクリーンの方がベターのようだ。幼・高みんなが近くに集まれて、話しやすかったり声が聞き取りやすかったりする。大きなスクリーンだと、高校生が立って話し、園児との距離ができる。話す声が聞きづらいし、高校生と園児がかかわりづらくなるように感じた。</p>
<p>② 幼稚園 児・小学 生・高校 生の様子</p>	<p>高校生</p> <p>D ・グループによって大きく違っていた。Tさん（前年度中学生の時に本小委員会企画の連携活動で中心的役割を務めた）のいたグループはとても上手だった。自分自身（観察者D）が引き込まれていた。その違いはどこから出るのか？ ・高校生は園児や小学生と自分たちとの感覚の違いを理解できた。 ・最後、絵本が終わった後、高校生がAKBの「恋するフォーチュンクッキー」（附属高校の教師が歌に合わせて踊っているビデオ撮影のDVD）をスクリーンで見せていた。高校生はDVDに合わせてうれしそうに踊っていた。小学生はやや複雑な表情だった。ややひいていた感じだった。 ・ずっと張り付いて観察していたグループは、「幼児を招こう」（前年度の中学校家庭科の保育学習で実施した幼稚園との連携活動）を経験した高校生が多いグループだったようで、子どもとのやり取りも上手で柔らかく、絵本の内容も、子どもの発達を考慮して作成されていたようだ。 ・昨年の連携活動に中学3年生として参加していた生徒をはじめ、皆さん、笑顔で幼児の相手をしていた。 ・幼児と小学生の違いを高校生は受け入れてきている。</p> <p>E ・プレイルームの入り口近くのグループ（女子生徒）は、絵本のストーリー、声色を工夫した話し方、子どもへの話しかけなど、上手だった。早く終わった時のために、男子生徒が絵本を用意してきて、「お兄ちゃんお家から絵本もってきたんだけどー、見たい人ー？」と惹きつけ、そのあと園児たちは絵本に釘付けだった。 ・高校生は、早く終わった時のために、絵本、手品、手遊びなど準備をしていたよかった。クイズや手品で盛り上げていたグループがあった。 ・昨年附属中学校家庭科で行った「幼児を招こう」などで経験している生徒は、幼児に対する接し方が慣れているように思えた。 ・小ホールの窓側の男子グループは、絵本のストーリー（一寸法師の変形）、話しかけ方、小学生とのやり取りなど上手だった。小学生に問いかけ、小学生の声を引き出しながら進め、約15分行っていった。時間が足りないくらいだった。</p> <p>F ・幼児に対しては、黙って読むだけではだめと言うことが分かったのはよかった。上手なグループは「何が始まるかな」「何が見たい？」と言っていた。</p>
<p>幼稚園 児</p>	<p>D ・年少なのに、集中して見ており、喜んでいた。 ・幼児は、思っていた以上に落ち着いていた。緊張していたせいもあるのだろうか。集中してデジタル絵本を見ていた幼児が多かった。 ・初めて目にする子どもの様々な様子に、自分にはまだまだ知らないことがたくさんあるのだということをしみじみと実感した。</p> <p>E ・始まる前に教室で、西多先生が「今日も高校のお兄さんやお姉さんがまた来て、見せてくれるよ」と言うと、数人の園児が「やったー！」と言って喜んでいった。 ・早く終わった時のために、男子生徒が絵本を用意してきて、「お兄ちゃんお家から絵本もってきたんだけどー、見たい人ー？」と惹きつけ、そのあと園児たちは絵本に釘付けだった。 ・園児たちは、高校生と接すること、遊ぶことを楽しみにしている様子、うれしそう、ほとんどの園児は始終笑顔だった。</p>

		F ・思ったより幼児の食いつきがよく、興味をもって見ていた。食いつく対象が、絵本の出来なのか、高校生の動きにかかわるのかはわからない。問いかけ、読み方の上手さに影響される。
	小学生	D ・小学生は大騒ぎだった。成功だったと思う。小学生は絵の上手な高校生に「ふなっしー描いてー」とリクエストしていた。 E ・予想以上に、小学生は高校生とのかかわりをとても喜んでる様子だった。 ・小学生の中に、昨年の連携活動（みそ汁づくり・お弁当交流会）に、幼稚園年長クラスで参加していた児童がいた。 ・ホールの窓側の男子グループは、絵本のストーリー（一寸法師の変形）、話しかけ方、小学生とのやり取りなど上手だった。高校生の話や問いかけ、絵本の面白さに全員よく笑って和やかだった。絵本に小学生は引き込まれていた。
	幼稚園児と小学生の違い	D ・幼児は、高校生の絵本内容のアレンジについていけない。ストーリーがずれ過ぎるとついていけない。幼児には伝わらない。小学生はついていける。例えば「大きなカブ」から始まり、後からディズニーのキャラクターを入れるなどは、幼児には理解が難しい。 E ・小学生は、幼児よりも、高校生への突っ込み・発言が多い。小学生はそんな高校生とのやり取りを楽しんでいた。 ・小学生は高校生が作成した絵本内容やアレンジをおもしろがっていた。懲りすぎたり細かすぎたりするのは、幼稚園児にはわかりづらいようだ。絵本そのものや作成した絵本を見るという点では、園児より小学生のほうが適しているように思えた。
③ 今後の実施について		D ・改善しながら継続していけたらいいと思う。4校園連携は画期的だと思う。 E ・高校生は、早く終わった時のために絵本やクイズなどを準備をし盛り上げていたが、簡単な手遊びなどを準備しているとさらによかった。1年生は、活動が始まる前に教室で、教頭先生との手遊びをとても楽しんでいた。 ・高校生にとっては、作成そのものは昨年度までと同じだが、今年度は絵本を見せる対象があり、そのための工夫がしやすいこと、実際に子ども達に見せて作成した絵本がどうだったのかが自己評価・反省できることはよかった。「情報」にとっては副次的ではあるが、高校生が年少児とかかわる機会がより多くもてることはよいだろう。 ・高校の事情が可能であれば、来年度も、改善しつつこの活動が行えると幼・小・高それぞれにとってよいのではないだろうか。 ・小・高いずれにとってもよい経験になりそうなので、今後は可能であれば小学生の1学年に広げられるとよいかもしれない。小学校も高校も1学年が3クラスなのでちょうどよい。 ・もしかしたら、この活動は、高一幼よりも高一小の方がやりやすいのかもしれない。高校生が作成しやすい絵本内容、小学生の絵本内容の理解、高校生とのやり取りなどの点で。 ・高校生のアンケートに、昨年の附属中学校で行った「幼児を招こう」やその他の幼児と接した経験について尋ねる項目を加えておけばよかった。次年度の事後の質問紙には、幼児とのふれ合い体験について質問項目を加えたい。

(発言のまま記載しているが、文末は常体に統一している。()内は著者による補足である。観点①②③に関連する内容は、重複して掲載している。)

D、E、Fは観察者である。

での幼児と接する経験が関連しているのではないかと推察された。高校生の約6割は、附属中学校を卒業しているが、前年度の附属中学校では、園児とのかかわりを数回取り入れた実践を行っている¹²⁾。その時に参加していた生徒が、本実践で活躍していることが観察されたからである。これらの関連性は次年度以降の研究により確認していく予定である。

また、本実践は高校の情報の授業で行われたが、生徒にとって本実践での園児や小学生とのかかわりは情報の学習においても有効であったと考えられる。「情報についての知識やスキルを身に付けるためにデジタル絵本を作成する」という授業のねらいは、本実践実施前と変わらない。本実践では、デジタル絵本を見せる対象がおり、実際に絵本を披露することで作成する目的や意義が明確になり、工夫し意欲も高まる。その点では情報の教科内容の充実になっている。しかし、本実践結果からデジタル絵本作成の前に、幼児の発達について学習が必要であることがわかった。本実践高校の教育課程では情報は1年生、家庭は2年生となっており、高校家庭科との連携は現状では困難である。今後は高校家庭科との連携や中学家庭科との連携を検討したい。今回は、情報の授業に子どもとのかかわりなどを組み込んだ展開であったが、教科間の連携による更なる展開を検討していきたい。

本実践は、幼小中高の4校園の連携活動を模索したが、結果として現在のところ中学校のかかわりができていない。当初計画したのは、高校生が作成したデジタル絵本や絵本紹介の様子を撮影したビデオを中学校家庭科の保育分野の教材として使用するということであった。今後は、この活動内容の実現性をさらに検討するとともに、他のかかわり方も模索していきたい。上述したように、中学校での保育学習の効果が本実践で垣間見られたが、情報の事前学習として中学校の保育学習を位置付けることも考えられる。

本実践は、4校園連携の1つの切り口であり、各校園のごく一部のかかわりである。家庭科にかかわらず様々な教科や教育活動において、幼・小・中・高間でかかわる経験を積み上げて行けるようにするとよいのではないだろうか。大学附属学校園だからこそできる実践であろう。

さらに、これらの連携活動の意味・効果を長期的に調査することができると、希少で意義ある研究になると思われる。幼・小での連携活動経験が、中・高生の意識や連携活動への参加状況に影響があるのか、中学生の経験が高校生に影響あるのかなど経年的調査も検討していきたい。

注および引用文献

1) 例えば、次のような研究がみられる。

浅川陽子、お茶の水女子大学附属校園(幼・小・中)の連携研究について(日本学習社会学会第5回大会報告)--(シンポジウム 幼・小・中をつなぐ教師と子ども)の協働--お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校の連携研究から)、日本学習社会学会 5、2009、pp.5-7

奈良女子大学文学部附属幼稚園 幼年教育研究会、幼・小・中等教育学校 連携研究の概要、研究紀要(奈良女子大学附属幼稚園)、第29集、2009、pp.1-8
竹早地区幼・小・中連携研究会、主体性を育む幼・小・中連携の教育：連携カリキュラムを支える取り組み(研究の概要)、東京学芸大学附属竹早幼稚園・小学校・中学校研究紀要(23)、2012、pp.4-13

竹早地区幼・小・中連携研究会、幼・小・中連携カリキュラムの検証：主体性を育む手だてを考える(研究の概要)、東京学芸大学附属竹早幼稚園・小学校・中学校研究紀要(26)、2015、pp.6-9

2) 文部科学省により「国立大学附属学校の新たな活用方策等に関する検討とりまとめ(平成21年3月)」が附属学校を置く各国立大学法人に対して提示された。そこでは、第3期中期目標・中期計画(H28-33)の重点事項の1つに、教員養成の実習の場としての役割とともに、大学・学部のもつ人的資源を活用しつつ、

公立学校で実施するものとは異なる先導的・実験的な取り組みを実施し、地域のモデル校としての役割を果たしていくことが期待されている。

3) 尾島恭子・綿引伴子・松田洋介・滝口圭子・橋本正恵・西多由貴江・中村正寛・中田泉、大学・附属学校園における連携活動の検討—家庭科を中心とした実践事例から—、金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要、第5号、2013、pp.45-53

4) 尾島恭子・綿引伴子・滝口圭子・松田洋介・橋本正恵・中田泉・西多由貴江、大学・附属学校園の幼小中連携活動の検討(1):みそ汁作り・お弁当交流会の事例から、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター、教育実践研究、第40号、2014、pp.27-36

5) 滝口圭子・綿引伴子・尾島恭子・松田洋介・橋本正恵・中田泉・西多由貴江、大学・附属学校園の幼小中連携活動の検討(2):みそ汁作り・お弁当交流会についてのインタビュー調査の結果から、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター、教育実践研究、第40号、2014、pp.37-47

6) 金沢大学学校教育学類・附属学校園研究推進委員会は、金沢大学人間社会学域学校教育学類(以下「学類」という)に、学類と附属幼稚園、附属小学校、附

属中学校、附属高等学校および附属特別支援学校(以下「附属学校園」という)との研究を推進するため、2004年に設置された(本委員会規程による)。本委員会のもとには小委員会が置かれ、学類の全教員および附属学校園の全教員が、いずれか1つ以上の小委員会に所属することになっている。小委員会数は年度により若干異なるが、2015年度は各教科以外に、特別支援教育、健康教育、附属学校園連携等合計13ある。小委員会の活動に制限等はなく、各小委員会が自由に行っている。

7) 橋本正恵・綿引伴子、中学校に幼児を招こう—幼児観察を通して企画を練り上げる問題解決型の学習—、荒井紀子編、新版 生活主体を育む—探究する力をつける家庭科—、ドメス出版、2013、pp.189-197

8) 前掲3)

9) 前掲4)

10) 前掲5)

11) 滝口圭子・綿引伴子・尾島恭子・松田洋介・川谷内哲二・西多由貴江・中田泉・橋本正恵・服部浩司、デジタル絵本でつながる 幼小中高連携活動2:児童・生徒の評価、金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要、第8号、2016、pp.61-69

12) 前掲3) 4) 7)